二〇二二年九月一六日

竹春の葉擦れさやけし嵯峨小径　宏　虎
蜻蛉の翅が一枚落とし物　かえる
子規句碑に添ひし丈余の萩愛づる　たか子
寡婦となり早七年や栗供ふ　ひのと
新蕎麦をすすりかしまし旅楽し　もとこ
更待や夜勤の仮眠室の窓　豊　実
剥く吾子の肘まで落つる梨の汁　そうけい
元気だせよと叱咤する鵙高音　明日香

二〇二二年九月一五日

幼な子の背伸びの先に柿ひとつ　かえる
珈琲を淹れて独りの夜長かな　澄　子
発掘の遺跡に群るる赤とんぼ　なつき
広芝をスクランブルす秋津かな　せつ子
紅芙蓉きりりと絞り今日を閉づ　満　天
蒲の穂に触れもし水上橋渡る　ぽんこ
魚信なき竿立て掛けて寝待月　豊　実
青蜜柑剥きたる爪の芳しき　む　べ
三つ編みを解いて花野に遊びけり　ひのと
秋霖に浮かぶ巨岩は石舞台　明日香

二〇二二年九月一四日

矢印を曲がれば匂ふ菊花展　みきお
青空へ縺れやまずよに蝶の恋　あひる
野の花と共に供へる新走り　澄　子
白々と激つ瀬に秋惜しみけり　明日香
ののさまへ供ふ新米ひとつまみ　ひのと
影もまた恋のリズムや揚羽蝶　あひる
白寿なほこころざしあり秋そうび　董　雨
寝ころびし顔をくすぐる花芒　素　秀

二〇二二年九月一三日

健吟を願ひて子規忌修しけり　たか子
立待や庭に見得きる松の影　豊　実
どの書にも父の遺筆や秋燈下　ひのと
火口なる奈落の水の澄みにけり　素　秀
遠山の裳裾真白き蕎麦の花　せつ子
鰹木の菊の御紋へ秋日燦　明日香
古暖簾褪せし酒蔵新走り　智恵子
宅急便父丹誠の今年米　智恵子
いつぷくのお薄に和む萩の寺　宏　虎
車椅子止めし路端の草紅葉　そうけい

二〇二二年九月一二日

祈る児の手の先まんまるお月さま　せつ子
投錨の音朝霧へ消えゆけり　ひのと
十六夜に寄る木星の淡きかな　豊　実
地球儀をまはして夜学始まりぬ　ひのと
恙無く仕舞湯に聴く虫の声　せつ子

二〇二二年九月一一日

草千里白露にまつ毛濡らす馬　智恵子
十六夜やこけしにもある夜の顔　素　秀
開け放つ生家の仏間鬼やんま　みきお
十六夜にゆふべの残り団子食ぶ　む　べ
大琵琶を覆ひつくして鰯雲　たか子
街灯の尽きたる路に月新た　ひのと
園児らの返事高らか小鳥来る　たか子
火灯窓風の芒の影法師　智恵子

二〇二二年九月一〇日

ものがたり始まりさうな野分雲　あひる
萩活けて匂ひの残る手を合はす　ひのと
虫の音に露天気分のわが家風呂　素　秀

毎日句会みのる選・二〇二二年九月一八日